The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	永田理事長と松山教授を憶ふ
Author(s)	稲束, 猛
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 66-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

に接するものをして、渇仰の念を起さしめずにはおかぬ。これは實に學と行と、融合混和して築き上げられたる人格の力である。さるにてもこの先生の下に在りながら、自ら磨くこと能はざる自分は、顧みて忸怩たらざるを得ぬ。先生の御逝去を悼むと丶もに、深く自ら愧づる所である。

永田理事長と松山教授を憶ふ

稲　束　猛

昭和二年に入つて我が懐德堂は先づ理事長永田仁助翁を喪ひ、其後任未だ定まらぬに、又教授松山直藏先生を失つた。頻々と不幸が續く年である。

永田理事長は人も知る大阪實業界の重鎮であつて、平生極めて多忙らしかつたが、よく健康に留意して居られたと見え、懐德堂に來られても常に元氣で若々しかつた。よく人から健康長壽に就いて聞かれたりすると、何時でも無雜作にそして例の翁一流の平易な調子で『別にこれといふこともしませんがネ、唯毎朝四時か五時に起きて築港の潮湯に浴して歸るのを日課にした位なものです』といつて居られた。長壽に就いては『心配をするといふ事が一番いけない樣に思ひます、自分が浪速銀行の頭

取をして居た際には責任上夜屢々眠られないので困りましたが、頭取をやめ、重荷を卸してからは、夜もよくねられ、氣ものび〳〵しました』と言はれた事があつた。當時私は銀行の頭取といふものはそんなに苦しいものかなあと思つた。所が本年の四月以來、財界の變動から、ある種の銀行は閉鎖され、休業又休業といふ始末で、今や數ヶ月に亘り、預金者の迷惑は言ふも更なり、一般社會にも其影響の及ぶ所頗る大なるものがあるが、まだ余り整理された例を聞かぬ、平生傲然として頭取顏した人々よりも反て其の部下の支店長位に責任を解するものがある樣に見受けられる。此處に至ると永田翁が銀行頭取として言はれた言葉は甚だ味がある。そして晩年翁が他の實業家などの思ひ到らなかつたか、或は思ふても爲し得なかつた事業、即ち懷德堂理事長といふ種類の役目を背負ひ込んで、懷德堂の爲に鉅萬の財を投じ、大阪の市民教育に力を盡された尊い一面も成程と首肯されるのである。此點に於いても翁の如き人は得難い。

永田翁が懷德堂理事長であつたことは知らない人も多からうが、翁が大阪實業界の元老であつたのは誰知らぬものもない有名な事實である。併し實業方面に關係のない私等が永田翁と出會ふのは常にこの懷德堂であつた。それも祭典とか、講演とか、其他臨時に用事が出來た場合であつて、其機會も頻々とはなかつた。何時御會ひしても何時も同じ調子で、平易に親み易く話をせられた。誰に對してもこの調子であつた。そして立派な地位の實業家に往々見受ける傲慢とか、無作法とかいふ風のこと

は永田翁には全くなかつた。寧ろ反對に上品で、温雅で、少しも物に忤らない如何にも好老紳士であると思はしめた。この點は翁が浪華實業界に重きをなして居られた事にも大なる關係があるのでないかと思はれた。

松山教授か嘗て親しく私に話されたのであるが、永田翁は平生固く翁自身の實業界に於ける地位なり信望は全く翁自身が青年時の泊園書院藤澤塾で受けた漢學教育の御蔭であると信じて居られたさうである、だから漢學教育の日に月に衰微に向へるを憂へて其振興に力を入れようと考へて居られたらしかつた。拾年前に故西村博士其他の人々と提携して懷德堂の重建に力を盡されたのも矢張りその意味からであつたらうし、近く漢學奬勵金として五萬圓を懷德堂に寄附されたのも無論その意味で、漢學者養成が其の重なる目的となつて居るのは勿論である。世を擧げて漢學振興に留意する者もなく、漢文科が中學校教課の一部に纔に餘喘を保つて居るも、一方に盛に漢字の制限されて居る樣では、理窟はいかにつくとも、近き將來、中等教育或は一般社會に漢學の復興など到底望めさうもない。然るに永田翁の樣に世間の事狀に明かな老實業家が強くそれを主張されたのは單に普通の老人が持つ復古的、保守的な輕い動機から來て居るものでないのは無論のことである。一體永田翁程大阪の實業家の內部の事狀に精通した人は稀であつた。早くより翁自身實業界に身を置かれ、晩年に至つても尙古老として矢張り活躍して居られたから、交遊の廣かつたのも他に匹儔が少い。隨つて年齡に於つて事業に於

いて、種々雜多の實業家が翁の面前に現はれ、翁とそれ〴〵交渉を持つて居た。それらの多くの人々は無論明治時代に學校教育を受けた相當な人々であつた。其關係から自然の必要上、翁は大阪（或はもつと範圍が廣かつたかも知れない）の實業家の性格、才能、內にしては實業家の修身齊家の方面より、外にしては銀行會社の經營、事業の隆替盛衰に至る迄極めて明確なる知識を持つて居られた。所が其間に翁が意外とせられる事柄が頻々起つた。それは父祖以來、矻々と築き來つた地盤が年を逐うて强固を加へ來り、最早や大丈夫と思はれた立派な家が何時の間にか跡方もなくなつたり、多くの銀行會社に關係があつて才能、手腕の卓絕せりとの世評あつた有名な人が意外にも暫くの間に脆くも挫折したりするのを目擊する事が尠くなかつた。翁は考へさせられた。何が故に多くの人々がかく九仞の功を一簣にかくか、何が故にかく危險性が多く確實性に乏しいのであるか、そして最後に翁は餘り知的訓育にのみ偏した明治の教育は結局實業家を養成するにも、人間をつくり上げるにも慊らぬ點が多いといふ所に到着された。これに較べると翁自身が青年時代に藤澤塾で受けられた漢學教育は其自身から見れば迂遠な直に世用に立たないかも知れぬが、人間をつくる上に少からぬ効果があつた事を深く感せられた。交友知己の至て多い翁が態々松山教授の媒介によつて漢學、今の言葉でいへば支那學出身の今の仁助氏を養嗣子とせられたなどは最も有力にそれを證して居るものである。だから永田翁が懷德堂の理事長であつたのを、よく世間にある單なる名目だけの事と思へば大に實際の事情に合はない。

西村博士の歿後、西村博士記念會が出來て金を募集されたことがあつた。永田翁には最初から成算あつての事で別に不思議でも何でもなかつたらしいが、側から見た眼にはよくも經濟界の不況の時代にかく瞬く間に數萬の金が集つたものと思はれた。これは全く永田翁の財界に於ける勢力の一反映であつた。其後永田翁と御會ひした時、談偶々この事に及んで、私は翁の盡力がなければ到底かゝる好結果を見る事が出來ないと感謝の意を表した所が、『近い將來に懷德堂の爲に一世一代の金集めをしますよ』と言つて笑はれた。果して昨大正十五年に入つて私等の知らぬ暫らくの間にこの財界の大不景氣をよそに拾數萬圓の大金を懷德堂基本金として集められた。永田翁ならでは出來ないことであつた。永田翁が一世一代といはれた時、まだ〳〵元氣な翁が一世一代はちと大袈裟な言ひ分だと思つたが、本年に入つて突然逝去せられて當時言はれたその言葉は妙に讖をなした。眞に痛惜に堪へない。

私が松山教授に初めて御目にかゝつたのは大正十一年の八月、伊丹の岡田文學士の宅であつたかと思ふ。岡田氏の祖先著齋翁は中井履軒先生の門人であつたから、逢原彫題其他履軒先生の著述並に竹山先生著作の重なるものも多くは當時の寫本の儘保存して居られた。これより以前に岡田氏はその事を私に話されて居たので、私一人で拜見するよりもと思つて吉田鋭雄氏を通じて他の懷德堂の諸先生に通知を願つた。松山教授、武內講師等が吉田氏と見ねたのであつた。その時に初めて御挨拶をした。

大正拾貳年四月以後、私が毎週一度、懷德堂へ講義に出る樣になつてから、週に一度は必ず松山教授

と御會ひする機會はあつた。平生懐德堂會議室の西北隅の一間半四方の小室に閉ぢ籠つて讀書をし、事務をとつて居られた。用談があると會議室の方へ出て來られて話をされたのであつた。何の用もないに漠然と唯世間話だけをされるといふことは殆どなかつた。

よく謹嚴といふが、松山教授位、謹嚴端正な人は少いと思ふ。教授の學生時代の事などは固より私等の後輩の知る所でないが、恐らく同樣であつたであらう。私の知る晩年の四五年間に見ても、喜怒顏色に現はれず、寛嚴度を失はずといつた風で、人と雜談せられるとか、人に冗談をいはれるとかいふ事は全くなかつた。殊に私等の敬服に堪へなかつた點は平生他人の行爲の暗黑な方面に就いては一切口にせられなかつたことである。交際の範圍が狹いので知られないのかと思はれるが、事實はさうでなかつた。よく聞いて知つて居られたが自らはそれを口にせられなかつた。それから先輩友人に對して常に敬意は失はれなかつたのは、平生談話の際、それ等の人々の姓名を口にせられても、敬稱して鄭重を極められたによつてもよく知られる。後輩でありながらどうかするとかげでは先輩を呼び捨てにしたりする表裏の多い世の中に、表裏といふことは初めから教授は知らないといふ風の人であつた。天稟の質にもよらうが、修養の力の大なるを認めねばならぬ。兎に角、現代には一寸匹儔の稀な人格者であつた。ある先生が昔に居られたら近江聖人とか何とかいふ種の人であらうと申されたが、いかにもさう思はれる點があつた。

謹直端嚴な人は往々人から窮屈がられるものであるが、教授も亦其一人であつた。其遵奉する學は朱學であり、其口にせられる所は德性涵養であつたから、教授の傍に居る人々、教授の講義を聞いて居る聽講生にも多少其色が見ねないでなかつた。否外部にも時々その聲を聞いた。併しこんな事は問題とする程の事でもない。それよりも教授の性格が謹直端嚴であつた爲に、懷德堂は官立、公立といふでもなかつたが、常に比較的嚴肅なる氣風の裡に今日迄講義を持續し來り、大阪の市中にあつて少しも俗塵に染まず、一種の威嚴と品格を持つて大阪市民の教育に當つて來たのは教授の力であつた。この點教授の功を認めねばならぬ。

松山教授は謹嚴端正ではあつたが、一面又非常に同情心があり、又非常に暖か味があつたから、年と共に教授の眞の尊い所が聽講生の大部分の人々には理解されて來たらしい。本年二月の末、教授が病臥されて其重患である事が知れ亘つて以來、聽講生の人々が教授の平癒を禱り、教授の看護をなし、其他種々教授の爲に奔走されたのは一寸筆紙に盡し難い。私は豫てから懷德堂に若も誇るべき何物かゝあるならば、それは懷德堂が創立以來今日迄持つて居る拾數名の聽講生の人々であると思つて居る。一體懷德堂に聽講生となつて連續して居る人々は何れも今の世には珍らしい感心な人々が多いのであるが、特に私のいふ拾數名の人々は懷德堂の寶ともいふべき人々である。此等の人々は今迄懷德堂に何か事件かあると必ず懷德堂の爲に盡力せられた。そして其盡力といふのが決して普通一樣の盡力でなか

つた。この事に就いては永田理事長も常々非常に感謝して居られ、今井理事の如きも亦其勞を多として居られた。懷德堂の祭典とか、式日とかに懷德堂に出入した程の人で、物事に注意深い人であるならば、私の言葉の實際なるを看取して居られるであらう。そして懷德堂が此等の他に比類なき貴重な聽講生を養ひ得た根本の原因に考へ至るならば、矢張り西村博士や松山教授の薫育、殊に終始一貫、德性涵養を高調して少しも渝らなかつた松山教授の教化を思はねばならぬ。

大正十五年十一月、懷德堂では其創立以來貳百周年、懷德堂重建以來拾周年に當るので、其祭典の日に拾ヶ年勤續の聽講生七名を表彰して十三經注疏一部と好學を賞する銀牌一個宛とを贈つた。其企ては豫てより松山教授からも聽いて居たので、私は話の序に廿周年の祭典には如何なる書物を贈られますかといふ樣な愚問を發した。所があの容易に笑はれなかつた松山教授が珍らしくも『廿周年の時などには最早や此世の中に居ないから、我輩などは關せずさ』といつて大に笑はれた。私は直に教授の言葉を打消して共に笑つたが、昨年の記念祭典に祭文を讀み、式辭を朗讀されたあの元氣な永田理事長が其後僅に數月を出ですして東京の客舍に長逝せられ、其歿後二ヶ月ならずして同じく記念式の教務報告をせられた松山教授も亦逝去せられ、昨年人を祭つた身が早くも本年人に祭られる人々の列に入られた。眞に感慨無量である。

松山教授は一見頑丈に見える體格をして居られたが、從來屢大患に罹られ、其都度大手術の必要があ

つたので回復後も健康の保持には絶ねず注意をして居られたらしい、阪道などは醫者の注意もあつたのであらうが非常に嫌はれた。併し近年は非常に元氣であつて懷德堂に出られない日は殆どないといふ有樣であつた。殊に懷德堂が西村家から故碩園西村博士の遺書を寄贈され、其記念文庫の建築案が確定してからは、松山教授の努力といふものは非常なものであつた。懷德堂藏書全部貳萬卷のカード作製から、カードの整理などに至るまで、多少他の人々も手傳つたが、殆ど松山教授自身事に從はれ、朝の八九時より夜の八時九時に至るは普通であつて、拾時になる折も屢あつたらしい。松山教授の事であるから其間に散步せられる事もなし、煙草は吸はれず無駄話は固より無い方であるから、他日自身研究の便宜にもなり、又學者としての書物に對する愛着の念もあつて、樂んで事に當られ普通の圖書館の役員か書物に何の興味もなく、多くは唯義務觀念のみより事に從ふのと違つて、將來に希望を持たれ大に乘氣がして精勵せられた。そしてそれが爲に往々過度に時間を送られたらしい。それも短日月ならまだしも、數ヶ月に連續して殆ど休息されなかつた。教授の傍に居る人々、聽講生の二三の人々なども教授の健康に障らなければと頻に心配をして居た、私自身も餘りに急がれ、餘りに過激に事務に熱中して居られると聞いて、後になつて一時に疲勞が教授を襲ひ、健康に障つては思つて、教授を諫めた事もあつたが、當時の教授はどん〳〵と事が捗取つて行く愉快を感じて居られたのであらう。又早く書庫内を整理し終つて悠々研究に從事したいといふ樂みをも持つて居られたのであらう。一向聞き

入れられさうになかつた。近時元氣であつたとはいへ、以前屢々大病をせられた經驗を持たれ、五十の阪を既に何年か以前に越された老體に休息も何もない數ケ月に亘る過度なる執務は松山教授不起の遠因となつて居たに相違ない。昭和二年一月以來、私は宿病又復再燃し來り、懷德堂の講義にも出られなくなつた。平生私の健康に就いて常に同情して呉れられた松山教授からは屢々深切な傳言があつて急かず養生せよとの事であつた。所が三月初のある朝、突然吉田助教授が見にて、松山教授が先月末以來病臥され、重患の樣に思はれると話され、御大喪の時東京の旅館で風邪に罹られたのが原因であると附け加へられた。私は非常に驚いて大事にならなければよいがと切に願つて居た。けれども其後だん〳〵と教授の容態の輕からぬ報が私の耳にも聞えて來るので氣が氣でなかつた。殊に過去に於いて教授が私の病氣に對して示された深切を憶ふて、教授を親しく病床に御尋ねすることが出來ないのを甚だ遺憾に思つた。三月二十一日、私も遂に病を推して松山教授の玉出の御宅を訪ねた。當時日によつては尙面會されるとも聞いたので、若しも少しでも御話することが出來ればと思つたが、不幸にしてそれは出來なかつた。四月下旬になつて教授遂に起たれず、私等の希望はすべて水泡に歸した。今後懷德堂に行つても最早や再び松山教授の溫顏に接する事が出來ないかと思ふ甚だ寂寥の感かある。

（昭和二年八月十四日）